厚岸・霧多布の自然

―― 厚岸道立自然公園 ――

1994

北海道自然保護協会

厚岸・霧多布の自然

―― 厚岸道立自然公園 ――

北海道自然保護協会

表　　紙　霧多布湿原
扉　　チンベの鼻海岸
公園の紹介　オオバナノエンレイソウ

厚岸道立自然公園

厚岸道立自然公園は1955（昭和30）年に指定されました。釧路湿原国立公園に近く、釧路市の東、昆布森から尻羽岬、厚岸湖、大黒島、藻散布、火散布、嶮暮帰島、霧多布湿原へかけた、丘陵、海岸、湖沼、湿原など、変化の多い地形と自然に恵まれた自然公園です。

面積はおよそ215平方kmあります。太平洋へ豪快に切り立つ尻羽岬、愛冠岬の断崖。海跡湖であって塩湿地植物群落や天然牡蠣で名のある厚岸湖。海鳥の楽園となっている大黒島。自然と人の付き合い方の原点が残されている藻散布、火散布。そして、見渡すかぎり平坦な湿原が拡がる霧多布。

太平洋が造り出した海蝕崖につづく丘陵には、ダケカンバやトドマツの見事な森林を見ることができます。また、厳しい環境のもとに成立する草原も見逃すことができません。

春から夏にかけて海霧に覆われる日が多いのですが、秋を迎えると晴天が続きます。雪の少ないこの地方、氷が主役の冬です。命あるものの、春を待つ姿がそこに見られましょう。

推薦のことば

北海道は、雄大な山岳とそこに広がる深い原生林、広大な湿原や湖沼群、そして、生き生きと暮らす野生生物など、北国らしい豊かな自然に恵まれており、６つの国立公園、５つの国定公園、12の道立自然公園を持っています。

「厚岸・霧多布の自然－厚岸道立自然公園－」はこうした自然公園のうち、海岸に沿って発達する段丘、霧多布をはじめとする大小の湿原、公園の中に生息育成する動植物など、すぐれた特色をもつ「厚岸道立自然公園」を紹介したガイドブックで、自然公園のシリーズとして２冊目となります。

自然は、人間に多くの恵みを与えてくれるかけがえのない財産です。この貴重な自然を次の世代へ引き継いでいくためにも、私たちの中により一層自然を大切にする心を育て、自然と人間が共存する社会を築いていかなければなりません。

このガイドブックが多くの皆さんに愛読され、北海道の自然について理解と関心を一層深めるきっかけとなるよう、心から願っています。

北海道知事　横　路　孝　弘

ミズバショウの花

オオサクラソウ

《自然のパラダイス》

本道に在住して間もないころ、〝自然派〟を自負する友人に、北海道でいちばん魅力的なところは何処か、を訊ねたことがあります。〝魅力〟は人それぞれですから、ずいぶん乱暴な質問ですね。けれども、友人は、躊うことなく、厚岸湾から霧多布につらなる道東の自然を挙げたのです。そんなやりとりが機縁となって、その後、何度となく道東を訪れ、友人の言葉を実感しました。

とおく近く、そそりたつ海食崖と優美な弧をえがく砂浜。花は咲き、蝶は舞い、渺茫とひろがる大湿原。台地をおおう豊かな植生や点在する湖沼群……。自然そのものに優劣はない筈ですが、道立公園にはもったいない（？）ほどの景観といったら叱られるでしょうか。

ご多分にもれず、こんな自然のパラダイスも、人間社会の葛藤や開発の圏外ではありません。地域の一角は、昨年、ラムサール条約の登録湿地に指定されました。すばらしい自然環境を心ない破壊や汚染から守り、後世にひきつぐことは、現世代の責任というべきでしょう。

自然公園シリーズ・そのⅡとして、「厚岸道立自然公園」をお届けします。例年のことながら、道や前田一歩園財団のご支援に加えて、今回は全労済からも助成をいただきました。多くの方々のご協力に、心からの謝意をこめて……。

小暮　得雄

あやめヶ原より

目　　次

麗しの大地　湿原　辻井　達一……5

太平洋が造る海岸の風景　吉元　豊……17

風と海霧に耐える林　新庄　久志……27

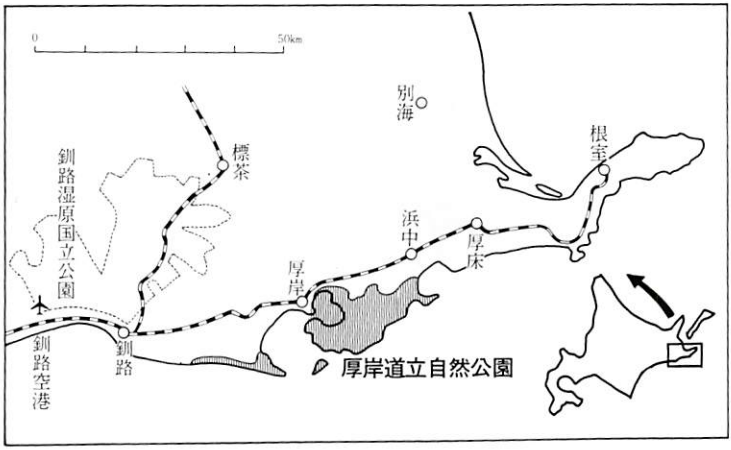
霧多布湿原のチョウとトンボ　文　飯島　一雄……33
写真　飯島　猛美

海の生きものたち　山田　真弓……43

霧多布湿原の魅力　伊東　俊和……49

あとがきにかえて　俵　浩三……56

イラストマップ　村野　道子……2

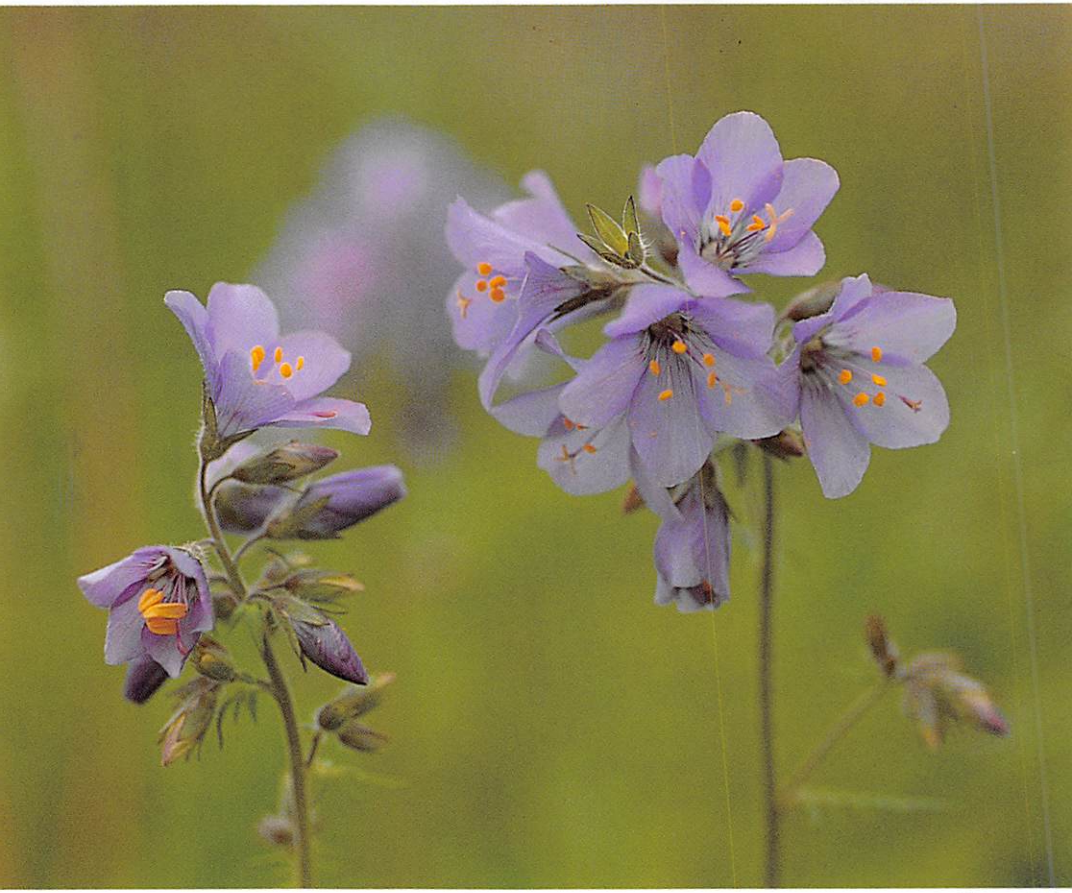


ヒオウギアヤメ

厚岸・霧多布の自然

タンチョウ
エゾフクロウ
エゾオオサクラソウ
オオバナノエンレイソウ
尾幌川
厚岸
JR花咲線
尾幌
バラサン岬
北大臨海実験所
釧路
国道44号線
釧路
愛冠岬
厚岸湾
仙鳳趾
タコ岩
尻羽岬
クロユリ
ミヤマハンノキ
トドマツ
ヒバマタ

ヒオウギアヤメ
ワタスゲ
エゾシカ
カラフトタカネ
キマダラセセリ
コムラサキ
イイジマルリボシヤンマ
浜中
別寒辺牛川
糸魚沢
茶内
浜中湾
ホタル
霧多布湿原
霧多布
帆掛岩
火散布沼
琵琶瀬湾
ゴメ島
厚岸湖
カキ島
琵琶瀬展望台
剣暮帰島
クシロハナシノブ
藻散布沼
道々1020号線
小島
大黒島
（あやめケ原）
チンベノ鼻
エトピリカ
ウミウ
エゾカンゾウ
（エゾゼンテイカ）
ホッカイエビ
ナガコンブ
ケイマフリ
ハクチョウ



クシロハナシノブ　　（梅沢　俊）

麗しの大地　湿原

辻井　達一

東北海道には湿原がよくみられます。釧路湿原を始めとして別寒辺牛、霧多布、風蓮、落石、標津などが並びます。丘陵でなければ湿原、という感じです。

東北海道にはなぜ湿原が多いか。

北海道東部にはなぜ湿原が多いのでしょうか。湿原は水がなければ成立しません。ですから水の溜まりやすい地形や土壌があればよく発達します。しかし、たとえば斜面で水はけがよい条件でも空中湿度が高かったりすれば湿原の成立する場合もあります。霧が多かったりして夏でも日光が妨げられることがあれば必ずしも水の溜まるような地形が無くても湿原が発達することがあるわけです。

東北海道のラグーンのひとつ「厚岸湖」

霧の多い東北海道の沿岸地方

北海道東部にはこうした条件がそろっていると言えるでしょう。日本列島の中ではもっとも冷涼で夏の気温が低い地方ですし、春から夏にかけては沿岸部ではことに霧がよく掛かります。積雪は少ないのですが土壌は深く凍結して春には水が溜まりやすくなるのです。

こうしてさまざまなところに、つまり低いところばかりでなくて時には丘陵や段丘の上などにも湿原が成立することになります。それはまさに湿原の博物館なのです。

湿原のアカエゾマツ

湿原とは何か

湿原とは字の示す通り湿った草原です。もっとも草原とは言っても中にはけっこう大きな樹林が生えているような場合もあります。世界でも有名なアメリカ・フロリダのエバーグレーズは特徴的なスパニッシュモスを長い髭のようにまとったポンドサイプレス（ヌマスギ）の林で有名ですし、熱帯に多いマングローブ林も海岸沼地を占めています。北海道の湿原にもしばしばアカエゾマツが立っていますし、シベリアやカナダの極地方に広がるタイガも湿原の林であるといえるでしょう。

しかし景観的には主役はやはり草ですから景色はどうしても平らな感じになります。広々とした草原に木が疎らに立っている、と言うのが一般的な湿原のイメージでしょう。

ただ、そこには前に述べたようにたっぷりした水があります。一見、いかにもアフリカのサバンナのようにみえるのですが足を濡らさずに入ることは不可能なのです。

平坦な湿原の風景
（後はこれまた平らなケンボッキ島）

湿原と泥炭

草原に水が溜まるとどういうことになるのでしょうか。植物は必ずいつか枯れますからその枯れ葉や茎は地上に倒れて積み重なります。そして、とくに多肉の部分は腐ってばらばらになります。しかし、固い繊維質の部分はなかなか腐らないで残ります。腐るのは酸化して分解することですから、もし空気が十分でなくて湿度が低いような状態があれば分解は進みません。水が溜まっていて植物の遺体がそこに浸っているような場合は分解は遅くなります。こうして未分解のまま積み重なった植物の遺体の上に、さらに枯れた葉や茎の固い部分が積み重なります。たとえて言うならば粗い目の織物のようなものと言いましょうか。

この積み重なったものが泥炭です。こう書くと何やら石炭や亜炭の仲間のように思えますが同じ植物起源のものでも泥炭はむしろ繊維質が単に積み重なった状態ですから強い圧

湿原のクロユリ

泥炭の堆積

力を受けて炭化した石炭や亜炭とはまったく別のものです。しかし、乾かして火を付ければやはり燃えますから燃料として使われます。スコッチウイスキーに香りを付けるのに無くてはならないものなのです。グリム童話にも泥炭を掘りに行かされる女の子の話があります。日本でも津軽地方では昔から燃料に使われていましたし北海道でも1960年代にはまだ泥炭ストーブがありました。

東欧、北欧諸国では泥炭を主材とした燃料材がありますが、泥炭産業としてはむしろ土壌改良材のほうが主流になりつつあります。ピートポットなど園芸用材としても重要です。

湿原の成立と発達

泥炭を含まない湿原もありますが、寒い地方では多くの場合、泥炭を含む場合が多いのです。

厚岸道立自然公園の中には霧多布湿原と別寒辺牛湿原の二つの代表的な湿原がありますが、これらは二つともに、泥炭の上に成立したものです。しかし、成立の条件と順序は異なっています。

霧多布湿原は海に沿って二つの長い弧を描く砂丘の発達によって切り離され、閉じ込められてできた湖をベースにして発達してきました。大昔はきっと現在の風蓮湖やサロマ湖のような形のものだったと思われます。風蓮湖もサロマ湖も最終的には今、私たちの見ている霧多布湿原のような形に近づくことでしょう。

霧多布湿原

霧多布湿原の中にある沼

ただ、霧多布湿原にはよくみるとその中に数条の砂丘が挟まっているのがわかります。この様子は榊町の高台にある展望台から特によく見えます。砂丘は山側のものが古くて、順々にその外側に新しいものが形成されるのですから、湖は一遍に埋まって湿原になったのではなくて、少しづつ砂丘によって海から切り離されながら縞目模様のように出来ていったことになります。古い砂丘と砂丘の間には今でも細長い沼が残っているところもあります。霧多布湿原のほとんど中央部にある氷切り沼、そして榊町にかけての海岸沿いにあるじゅんさい沼などはその代表的な例です。

厚岸の別寒辺牛湿原は霧多布湿原とは異なって、根釧原野の特徴的な浅い谷に沿って形成されたものです。3000年位前に次第に海が退

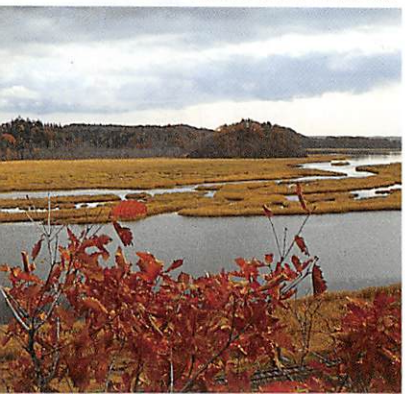
ネムロコウホネとエゾヒツジグサ

別寒辺牛湿原

いて、浅い谷ができ、そこに湿原が発達していきました。始めは浅い水溜まりにヨシやガマの群落ができたものと思われます。そのヨシやガマの枯れたものが積み重なって先に説明した泥炭として堆積すると、次にはそれよりも栄養が少なくても育成するヌマガヤ、ワタスゲ、ゼンテイカ（エゾカンゾウ）などが多くなってきます。これらは今、私たちが霧多布湿原の夏によく見るものです。

次いで、更に泥炭の堆積が進むと湿原の中央部は隆起してきて、そこには川の運ぶ栄養物質、ミネラルは洪水の時でも届きにくくなります。そして貧栄養的な条件でも生育する種類が多くなります。そして最後にミズゴケ類の多い群落が現れるのです。

別寒辺牛川の河口湿原



塩湿地とアッケシソウ

厚岸の名を持つ植物があります。アッケシソウというのがそれです。この植物はアカザ科の一年草で、葉が無くて肉質の茎だけでできています。細いソーセージをつないだような形です。春から夏までは緑色ですが秋には赤く紅葉してきれいです。その形と色からサンゴソウとも呼ばれます。

大抵の陸生植物は塩分にさらされると体の中の水分を取られてしまって生育ができなくなりますが、アッケシソウを始めとする一群の種類は体内の細胞液が濃くて浸透圧が高いので水を塩水に吸い出されることがありません。こうした種類を塩生植物といい、それらの生育するような湿地を塩湿地と呼びます。これも湿原の一つのタイプです。

塩湿地は遠浅の泥質海岸にしばしば発達します。塩湿地植物群落はその中でも波や潮流の影響の少ない場所に成立します。つまり内湾やラグーン（潟湖、海に続いた湖）などによくみられることになります。厚岸湖もその条件を備えていますから、ここに塩湿地とその群落が成立するわけです。これも湿原のひとつのタイプです。

厚岸湖や、霧多布湿原の川沿い、火散布および藻散布湖畔にはこの塩湿地がみられます。ことに厚岸湖畔や、厚岸湖に注ぐ別寒辺牛川の河口には広い塩湿地があって、その一部は厚岸町を通る国道からも、鉄道（花咲線）からも見ることができます。

アッケシソウ

シバナ

カラクサキンポウゲ

エゾゼンテイカ

エゾフウロ

タチギボウシ

湿原を大切に楽しむ。

ここに紹介したように厚岸道立自然公園は海岸段丘の森林と共にいろいろな湿原のタイプが楽しめるところです。

霧多布湿原には茶内から琵琶瀬へのルート沿いに湿原センターがあって湿原についての情報がえられます。ここからは完全な設備を備えた展望室から広々とした湿原を十分にゆっくりと見ることができます。

展望地としては厚岸から海岸に沿って霧多布に向かうと琵琶瀬台地の上に展望台がありここからはゆったりと流れる霧多布川の大きな蛇行を見ることができるでしょう。

霧多布でも、そして厚岸でもカヌーによる川からの湿原探勝ができます。ことに厚岸の別寒辺牛川にはカヌー・ステーションが設けられました。もっとも接近して湿原の自然を楽しむことができる方法の一つですがこのことは同時に野生生物にとっては彼らの生活域に立ち入ることになるわけですから、できるだけ彼らを脅かすことのないように心掛けなければなりません。

ナガボノシロワレモコウ

ノハナショウブ

ワタスゲ

タンチョウの営巣や育雛を妨げないように或る期間はカヌーの使用を制限しなければならない区間も考えられます。永く自然と良いお付き合いをするために、こうした自主的規制にも協力して下さい。

動物に対すると共に植物への配慮もひつようです。湿原は弱い自然ですから、ただ一人が一度だけ歩いただけでも湿原の表面は傷つきます。探勝のために木道が設けられているのもそのためです。木道から湿原面に降りないように、そして植物は一本でも採らないようにしましょう。高山植物などではこうしたことがかなり守られているのですが、湿原もまたまったく同じ重要な自然なのです。しかも北海道東部はそのもっとも典型的なタイプの見られるところなのです。

湿原をくだる

海蝕崖の連なる海岸線　　（新庄　久志）

太平洋が造る海岸の風景

吉元　豊

釧路から一輌編成のデイゼルカーにのってＪＲ花咲線を東へひた走り、やがて門静に着くと右の車窓に広々と厚岸の海が見えてきます。このあたりからの海岸がとても美しい厚岸道立自然公園のはじまりなのです。

魅力ある海岸線

厚岸道立自然公園の魅力のひとつに、変化に富んだ海岸線があります。この自然公園は、釧路町の太平洋沿岸の来止臥（キトウシ）という小さな部落から尻羽岬（シリハ）までと、厚岸湾をはさんで対岸の愛冠岬（アイカップ）から霧多布（キリタップ）の少し先の浜中町榊町という部落までの海岸地帯が厚岸道立自然公園の範囲にはいります。

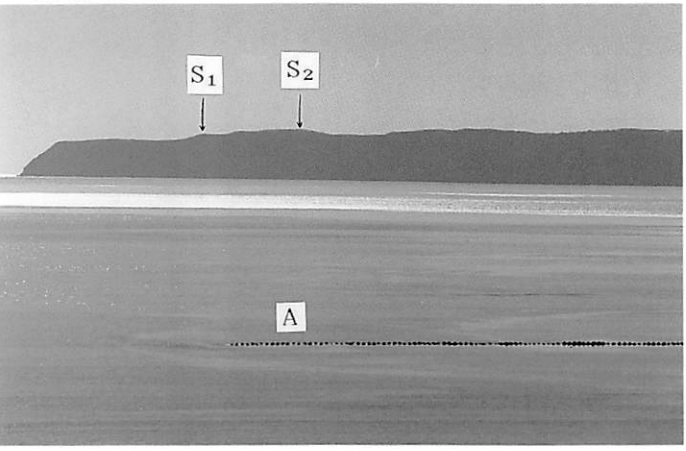
この海岸は尻羽岬までの西側の地域は海岸線はほとんど直線的ですが、厚岸町付近から東は、とても屈曲に富み岬が多くなり断崖が切り立って荒々しい地形を示すようになります。そして所々小さな湾入があり、そこには砂浜がみられ、人家が寄り集って漁業を営んでいます。この荒々しい断崖も東に進むにつれて次第に低くなり浜中町の琵琶瀬（ビワセ）の少し手前で消えてしまい、それから東は霧多布の湿原が広がり、海岸線は霧多布島を境として二つの美しい弧を描く砂浜がつづきます。

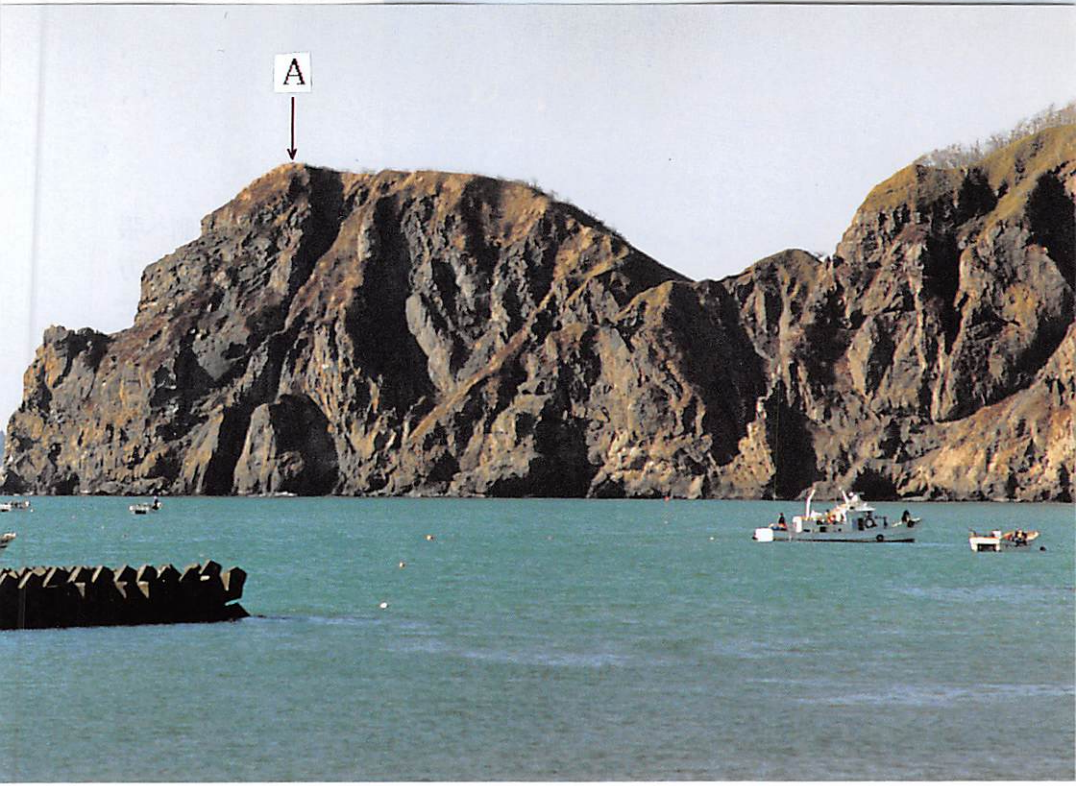
そして霧多布湿原の北の端、榊町付近でこの公園は終っているのです。この公園の美しさは太平洋の荒波によって削られた断崖と岬や湾入に富んだ長い海岸線にあるようです。

来人臥から尻羽岬まで

この海岸線は単調で遠望するとおだやかな岬にみえますが、ほぼ東西に20kmほどのびて、断崖が連続しています。断崖は太平洋の荒波に削られ、高くそそり立っている海食崖で、高さは50～60mに達し、尻羽岬のあたりでは120mにも及び、下の波打際から見上げると崖が押しかぶさってくる様に感じられ、まさに壮観そのものです。海岸近くには高さが10～20m位の岩礁が散在します。その形から塔状（冬窓床（ブユマ）のローソク岩）、三角状（来止臥（キトウシ）－十町瀬（トマチセ）の立岩、十町瀬のタコ岩、トド岩）、四角状（尻羽岬の帆かけ岩）など様々な形のものがあります。

尻羽岬遠望（厚岸湾望洋台より）
S_1、高さ133.6、S_2高さ140m、手前の海は厚岸湾（A）





アイカップ岬、（筑紫恋海岸から）
Aは高さ78.7m

厚岸湾から霧多布まで

厚岸湾から東側の海岸線は尻羽岬側の海岸線とは一変して出入りの多い屈曲した海岸に変わります。断崖や砂浜もあり、近くに島も見え、大小の湖沼や湿原もひろがって変化に富み、雄大な自然美を描き、厚岸道立自然公園の中核をなしています。

厚岸小島
（背後は大黒島の一部）

立岩（藻散布）

（b）島と岩礁

この海岸には島や岩礁が多くみられます。厚岸湾の入口には大黒島、小島、霧多布には霧多布島、嶮暮帰（ケンボッキ）島、小島、ゴメ島など大小の島々が点在しますが、比較的大きな大黒島や霧多布島、嶮暮帰島は周囲を断崖で囲まれ、上は対岸の台地と同様な高さの平坦な面になっています。このことは海水の侵食によって陸地から切り離されたものであることを示す証拠の一つでしょう。

岩礁は小さなものが多いのですが、中には藻散布（モチリップ）の立岩、ローソク岩、霧多布の帆掛岩、黒岩、渡散布（ワタリチリップ）の窓岩等特異な形のものもみられ海岸の風景に趣きをそえています。

窓岩（渡散布）

（c）湖沼、河川

この海岸には厚岸湖、火散布沼、藻散布沼の塩水湖、小さな淡水の床潭沼（トコタン）があります。厚岸湖は周囲約26km、湿地と台地に囲まれ、西側で厚岸湾とつながれています。この湖は牡蠣が名産で湖内には大小の牡蠣島が存在します。

浜中間の火散布沼、藻散布沼は1km程しか離れていませんが共に塩水湖で、両沼とも周囲を台地に囲まれ、沼の南端、東端がそれぞれ海に通じております。この二つの沼の形や位置から、もともとここに沢があり沈降して海水が侵入し、おぼれ谷をつくり、それが現在の両沼となったものでしょう。火散布沼は面積約3.5㎢、藻散布沼は面積0.6㎢の小さな沼です。床潭沼は厚岸町の床潭部落の近くにあり南側で海とつながっています。この沼には道指定の天然記念物の緋鮒が生息しています。面積は0.1㎢に足りない小さな淡水湖です。

琵琶瀬川（霧多布湿原）

河川は厚岸湖に注ぐ別寒辺牛（ベカンベウシ）川、尾幌川と、霧多布湿原を流れる琵琶瀬川だけで、あとは名もない短い小さな流れがあるだけです。これは分水界が海岸近くを走るためでしょう。

（d）海岸段丘

釧路から東の地域は海岸段丘が発達していて、平坦な地表面がひろがります。内陸にも広く発達して、釧根台地といわれております。この厚岸道立自然公園には高さ140m以下の数段の海岸段丘が海岸に迫っています。

湯沸部落より湯沸岬をみる

湯沸岬の20m段丘面

岡崎由夫先生によるとこの段丘を根室面（T_1面、高さ140～70m）、次いで釧路面（T_2面、高さ60～40m）、30～40m面、17～25m面（T_3面）、10～15m面の5段にわけておられます。高位の根室面は尻羽岬、厚岸から浜中町散布付近まで発達がみられ、それより東は低い釧路面があらわれてきます。霧多布付近ではより低い20～15mの段丘が見えはじめ、更に東の根室方面ではより低い段丘が更にふえて、全部で5段の段丘面が認められます。

釧路市から浜中町散布までは1～2段、霧多布以東では3段以上に発達した海岸段丘が認められます。

海岸段丘や河岸段丘は過去の地盤の昇降運動を反映したものです。従って段丘数の多少は、地盤運動の多少を示しています。

あやめヶ原のダケカンバ林　　（鮫島惇一郎）

風と海霧に耐える林

新圧　久志

北海道東部の約215kmにおよぶ海岸線には、釧路をさかいに東と西で対照的な海岸風景が展開しています。十勝地方を経て襟裳岬につづく西の海岸には、砂浜・砂丘海岸がほぼ一直線にのび、東へは高さ30～50m、ときには100mの切り立った海食崖が連なっています。いくつもの湾が出入りし、岬が海につきだし、大小の島や離れ岩が点在して、複雑な海岸線が根室の納沙布岬までのびています。この変化に富んだ海岸は、多様な自然を育んで人々を魅了し、道立自然公園に指定され、ノース・イースト・シーサイドラインとして親しまれています。

海岸は寒流の千島海流にあらわれていますから、たえず冷涼な海風が沿岸に吹きよせています。夏には、千島海流と暖流の日本海流の混流によって発生する海霧が、太平洋高気圧からの卓越風によって運ばれ、沿岸を厚くおおいます。ですから、年平均気温は５～６度と低く、植物が生育する月平均気温に注目した温量指数（暖かさの指数）も45～50とわが国の最低で、もっとも冷涼です。

したがって、沿岸に分布する樹林はごく限られてしまいますが、この厳しい生育条件に適応した特異な樹林景観を観察することができます。

海に突きでた海岸段丘

海岸段丘に点在する風衝林

海岸段丘に点在する風衝林

点在する風衝林、ミヤマハンノキ

海食崖で海に面した海岸段丘の上には、冷涼な気候の地域に分布するエゾミヤコザサの草原がひろがっています。そのうち、やや風をさけることのできる谷地やわずかな凹地で、ミヤマハンノキのわい生化した風衝林が点在しています。樹高60～150㎝で、大きめのブッシュといった感じの林です。幹の太さは5㎝内外、枝がこみあっていて、林の中を通りぬけるのがたいへんなほど密生しています。林というよりは、数十本の樹のかたまりといった群落です。ミヤマハンノキは本来は、標高1,000m内外の山岳地、森林限界線付近に分布しているのですが、北海道東部の海岸線が山岳地上部の気候条件と似ているために、当地にも分布しているのです。なかにはケヤマハンノキやエゾノコリンゴなどもまじっていますが、いずれもわい生化しています。

偏形樹

帯状の偏形樹林、ミズナラ、ダケハンバ

海岸線からやや離れて、内陸の樹林地とのさかい付近には、枝が内陸の方になびくようにあつまって、旗のような樹形の偏形樹林が分布しています。林の幅は100～150m、海岸線と平行して帯状にひろがっています。海岸線に近いほうは樹高150～200㎝、内陸にむかうにつれて樹高が高くなり、旗状の偏形の度合いも少なくなってきます。ミズナラやダケカンバが中心で、なかには、ミヤマハンノキやケヤマハンノキ、アオダモ、バッコヤナギなどもまじったりします。ダケカンバはミヤマハンノキと同じ、内陸の山岳地の上部に分布している樹種です。

初夏の強風が吹いた翌日、海岸の偏形樹林をおとずれると、海側の枝先の新芽や新葉に、潮風が吹きつけて白っぽく塩分が残った樹林に出あいます。まるで、漬物の一夜漬けにでもされてしまったようです。内陸側の方の枝先はそれほどでもありません。こんなことのくりかえしによって海側の枝を欠いて樹枝が旗状になった偏形樹林ができるのでしょう。樹の頂部のところも同様に枝の生長が阻害されて、遠くから望むと、まるで刈りそろえたように海側の低い樹高から内陸にむかってゆるやかに樹高が高くなっている様子を観察できます。

海岸段丘の偏形樹林

海岸段丘の偏形樹林

海岸段丘の針広混交林

サルオガセをつけた針広混交林

ミズナラやミヤマハンノキ林の背後には、海風の影響を直接うけない樹林が分布しています。樹高20m内外の樹林で、トドマツ、エゾマツ、イチイなどの針葉樹と幹の太さが数十cmの大木になったミズナラやダケカンバ、イタヤカエデ、ケヤマハンノキ、ハリギリ、シナノキなどの広葉樹がまじった針広混交林です。

林の中の大半はエゾミヤコザサの群落がしめますが、谷沿いの湿ったところになるとスゲ類やシダ類、常緑低木のフッキソウ群落なども出てきます。

樹林は、1年の大部分が海霧におおわれて湿潤ですし、いつも海風が吹きぬけていますから、地衣類のサルオガセが繁茂して、樹枝にからみついています。こんな樹林は、冬、寒風をさけてあつまるエゾシカや野鳥、ほとんど野生化した放牧馬の絶好の休息地になっています。

ミズゴケ泥炭地のアカエゾマツ林

一方、北海道東部の沿岸には、冷涼で湿潤であるためにミズゴケ類の発達する泥炭地が分布しています。沢地や海岸段丘のわずかな凹地に泥炭地が点在し、そんなところに樹高15～20m、幹の太さ30～40cmのアカエゾマツが分布しています。他の樹種がほとんどまじらないアカエゾマツだけの樹林です。サカイツツジが隔離分布する根室の落石岬、温根沼、春国岱などに大きな樹林を観察できます。

アカエゾマツは、内陸の火山岩れき地や火山灰地、湿地、沿岸の湿地、砂丘地に分布しています。いずれも他の樹種には生育のむずかしい立地です。そんな生育条件の悪いところに成立するアカエゾマツ純林の適応の様子を観察することができます。

北海道東部の海岸線には、海霧をともなった海風の卓越に耐えて生育する風衝林や偏形樹林、冷涼な環境で多様な樹種を育む針広混交林、まずしい生育条件に適応するアカエゾマツ林など、当地方の気候、地形条件をよく反映した樹林が分布し、私たちをむかえてくれます。

アカエゾマツ林の林内

アカエゾマツ林の林床

クジャクチョウ

霧多布湿原のチョウとトンボ

文．飯島　一雄　　写真．飯島　猛美

＜早春のチョウ＞

雪が消える３月下旬、気温が摂氏10度ほどの日和になると、日当りの湿原べりには成虫で越冬したクジャクチョウや、エルタテハを見かけます。エルタテハの幼虫は樹木食で、ハルニレの葉を食べますが、クジャクチョウの幼虫はエゾイラクサを食べます。エゾイラクサはコヒオドシ、アカマダラ、サカハチチョウなどの食草でもあります。

＜春のチョウ＞

４月下旬になると蛹で越冬した仲間たちが次々と羽化します。エゾスジグロシロチョウが１番手として羽化し、幼虫はコンロンソウを好みます。ホザキノシモツケを食べるコツバメも、湿原べりの沢地に見受けますが、このチョウは小型で色彩が地表の色と似ていて目立ちません。

春も真盛りの5月、湿原中のオオバセンキュウや、トウヌマゼリなどのセリ科食のキアゲハが目立ちます。周辺のキハダ食のミヤマカラスアゲハも、湿原の湿地へおりて吸水します。最近では昭和の中期頃までよく見かけた、集団吸水の群れはほとんど見られなくなってしまいました。それは食樹のキハダが枯渇してきたからでしょう。

小型なツバメシジミや、ルリシジミはアカツメクサや、エゾヤマハギなどのマメ科植物を食べ、湿地やときには路上に落ちた家畜の糞尿に大量にむらがったものですが、この吸水情景も近頃ではほとんど見られなくなりました。路面が舗装化されたことや、家畜が車両で輸送されて、汚物が路上に落ちることがなくなったのが原因かも知れません。

キアゲハ

エゾシロチョウ

＜初夏のチョウ＞

６月になってガスの季節があけると、待ちかねたかのようにエゾシロチョウが羽化します。シロチョウ科の仲間では１番大きいのと、真っ白なので人目にとまります。幼虫は河畔林のエゾノコリンゴを集団で食害します。町の庭園に植えられたヒメリンゴなどを丸裸にする毛虫はこのチョウの幼虫です。

この頃湿原べりで見かけるセセリチョウ科のカラフトタカネキマダラセセリはイネ科食で、よくイワノガリヤスに産卵します。

ジャノメチョウ科では１番早く出現するのがシロオビヒメヒカゲで、これはカヤツリグサ科の植物を食べます。これら３種のチョウは日本列島では北海道の特産種です。

カラフトタカネキマダラセセリ

コキマダラセセリ

＜夏のチョウ＞

道東部の夏は７月から８中頃までの、わずか１ヵ月余りです。

種類数、個体数ともに１番多くなる季節です。７月中旬頃から２化目の種類が出現します。ゼフィルスと総称されるミドリシジミの仲間16種余りもいっせいに出現します。でも湿原に生息するゼフィルスはミドリシジミ１種だけです。母蝶はヤチハンノキの細枝や、冬芽の近くなどに産卵し、卵で越冬します。

黄色で中型のヒョウモンチョウの仲間は、道東部に11種生息しています。この内７種は各種のスミレを食べ、ゼフィルスと同じ年１化性です。湿原へよく遊びに降りて来るのはウラギンヒョウモン、ウラギンスジヒヨウモン、ギンボシヒョウモンなどです。

樹木食のフタスジチョウは黒と白の帯が目立ち、幼虫はホザキノシモツケを食べます。

セセリチョウ科でよく見かけるのはコチャバネセセリで、家畜の糞尿にむらがって集まり吸水します。食草はエゾミヤコザサです。

黄色味を帯びたコキマダラセセリもよく湿原へ降りてきますが、幼虫はイワノガリヤスなどイネ科食です。

ジャノメチョウ科が多く出現するのは夏です。クロヒカゲ、ヒメウラナミジャノメ、ジャノメチョウ、サトキマダラヒカゲなどが、沢地の入りこんだ林間に多く見受けます。ヒョ

ゴマシジミ

コムラサキ

ウモン類と同じく年１化性で、食草はエゾミヤコザサなどのイネ科食です。

シジミチョウ科は道東部には30種余り知られています。湿原に生息するのは先にあげたミドリシジミとゴマシジミの２種で、本種も年１化性で母蝶は食草であるナガボノシロワレモコウの花穂に産卵します。幼虫は蕾や花を好むのです。

河畔林のヤナギ類を食草としているコムラサキも、８月に入ると湿原べりで吸水しているのを見かけますが、光線の当り具合で翅が美しく光ります。

＜秋のチョウ＞

ガの中には秋から初冬だけに出現するグループが知られていますが、チョウの中には秋に限り出現する種は知られていません。成虫で越冬するクジャクチョウなどタテハチョウ科の仲間たちは、秋口エゾノキツネアザミなどで吸蜜するのを見かけますが、きびしい冬を耐えたものが再び春に活動するのです。

＜春のトンボ＞

春１番に出るのがヨツボシトンボです。５月に出始め、多くの止水の池に生息します。

釧路湿原には春のトンボで著名なエゾカオジロトンボが知られていますが、霧多布湿原からはまだみつかっていません。

成虫で越冬する唯一の種、オツネントンボが釧路地方に知られていますが、これも霧多布湿原からは未発見です。

ヨツボシトンボ

カラカネトンボ

ルリイトトンボ

＜初夏のトンボ＞

6月前半にはルリイトトンボ、カラカネトンボ、コサナエ、オオトラフトンボなどが出始めます。下旬にはエゾトンボ、キバネモリトンボ、コエゾトンボ、シオカラトンボなどと続きます。羽化して1～2時間後には水域を離れて、周辺の森へ移動しますが、エゾトンボの仲間はさらに内陸へ旅行します。

コエゾトンボ

＜夏のトンボ＞

7月に入るとキタイトトンボ、カラカネイトトンボ、ルリボシヤンマ、イイジマルリボシヤンマ、ホソミモリトンボや、アキアカネを含むいわゆるアカトンボの仲間（霧多布湿原では8種）もいっせいに羽化し周辺の森へ移動します。ヤンマ科や、トンボ科のものは釧路湿原では30～40kmも行動することが知られています。イトトンボ科の仲間たちはせい

カラカネイトトンボ

イイジマルリボシヤンマ

ぜい周辺の森までで、森はトンボたちにとっても大切な生活の場所なのです。

これらのトンボたちが成熟して再び湿原の水域へもどるのは8月で、湿原はトンボでいっぱいになり秋は少しずつ深まってゆきます。

湿原の多彩なチョウやトンボたちにみな登場させたいのですが紙数がつきました。別な機会に御紹介するといたしましょう。

厚岸バラサン岬先の北大厚岸臨海実験所。

厚岸アイカップ岬より（右より）大黒島。
小島、アイニンカップ岬を望む。

海の生物

山田　真弓

1955年に指定された厚岸道立自然公園は、釧路東方の昆布森付近から東に向かって厚岸、霧多布あたりまでの地域で、海岸・湖沼・湿原・丘陵などを含んでいます。この海岸線は直線でも約60kmに及んでおり、この近くの海に住む生物は実に様々ですが、そのごく概要だけを簡単に述べてみましょう。

厚岸湖臨海実験所

1931年に北大の厚岸臨海実験所が厚岸のアイカップ岬の近くに設けられ、以来60年以上にわたって、そこを中心にこの付近の海の生物についての研究が行われて来ました。釧路から根室半島あたりにかけての道東の沿岸は、千島列島沖を通って南へ流れている寒流（親潮）の影響を強く受けており、そのためにそこに住む海の生物も一般的に北方系の種類が多くを占めており、さらに厚岸湖のように海につながってはいても海よりも塩分濃度の低い水域もあり、それら環境の多用性もそこに住む生物の種類の多いことにつながっています。

この辺りに限らず、海にいる生物は実に様々で、波打ち際にすむもの、深い底にいるもの、水中を漂うプランクトンのようなもの、砂や泥の中に潜っているもの、などいろいろで、また大きさも顕微鏡がなければ見ることの出来ないような小さなものも少なくありません。ここでは私達の目に触れやすいようなものだけをいくつか取り上げてみましょう。

道東地方は昔から一般に漁業が盛んです。この辺の沿岸で獲れる魚としては、サケ・マスなどのほか、ニシン・チカ・シシャモ・キュウリウオ・コマイ・カレイなどいろいろありますが、このうちシシャモやキュウリウオなどは産卵のため川へ上がります。

キンコ

エラコ

エラコの住んでいる管の集まり

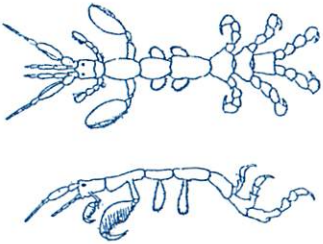
ヒメエゾボラ

チシマフジツボ

イワフジツボ

クロタマキビ

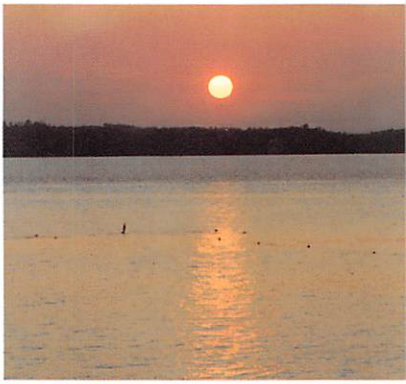
エゾタマキビ



ワレカラ

潮が引いたとき

潮が引いたときに岩や転石のある磯へ出てみると、様々な動物が目につきます。普通にいるものでは、ヒトデ・ウニ・キンコなどの棘（きょく）皮類、ホタテガイ・ヒメエゾボラ（ツブ）・タマキビ・その他多くの貝類、クリガニ・ハナサキガニ・イソガニ・ホッカイエビ・岩などに固着するフジツボなどの甲殻類、また石などを引っくり返すとそこにはカイメン・ヒラムシ・ヒモムシ・ゴカイ・エラコ・ホシムシ・ヨコエビ・ホヤなどいろいろな動物が動き回ったり、または付着しているのが観察されます。また海藻も豊富で、大形のコンブ類のほかエゾイシゲ・ヒバマタ・ギンナンソウ・フノリ・ウガノモク・ヒゲナガマツモ・その他が普通です。また海がしけた後などに浜にいろいろな海藻がたくさん打揚げられることがありますが、そんな海藻にまざってヨコエビ・ワレカラなどの甲殻類やまた小形の貝類などがよく発見されます。

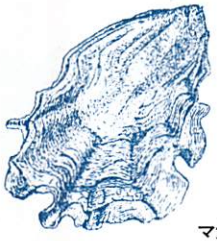


厚岸湾の落日。

干潮時の厚岸アイカップ岬付近の磯。

干潮の厚岸大黒の磯。ナガコンブが繁茂。6－7月は霧が多い。

厚岸湖

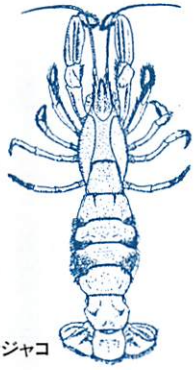


マガキ

厚岸湖は小さな入口で厚岸湾につながっていますが、ここには他ではみられないものがいくつか住んでいます。湖の入口近くにあるカキ島は古くからのカキの殻が堆積してできたものですが、現在では主に他所から移入したカキを養殖しています。カキ島付近にはここ特有のカキジマコンブが生育し、また付近の砂泥地には細長いアマモが繁茂しています（アマモは海藻ではなく、顕花植物で花をつけます）。またこの辺にはアサリが豊富で、そのような所にはタマシキゴカイやアナジャコも住んでいます。厚岸湖の奥の方の岸にはかつてはアッケシソウ（別名サンゴソウまたはヤチサンゴ）がたくさん見られ、秋には全体が朱紅色となりきれいでしたが、今では少なくなってしまいました。アッケシソウは塩分を含んだ岸近くに生育するもので、現在ではサロマ湖などオホーツク海岸の方が有名になってしまいました。

厚岸湖入り口付近の砂泥中生物の採集。

生きものが少なくなる！



アナジャコ

本自然公園の沿岸にはアザラシなどの海獣類もみられます。アザラシはアイヌ語でトッカリといいますが、現在でもこの地方の人々はアザラシよりもトッカリと呼ぶことが多いようです。アザラシは岩礁地帯に住み、海中に潜ったり岩に上ったりしますが、冬に流氷に乗っているのを見かけることもあります。残念ながら近年アザラシの姿はだんだん少なくなってしまいました。

ホッカイエビ

上に述べたように、この沿岸で海の生物の最もよく調べられたのは厚岸を中心とした海域ですが、たとえば厚岸臨海実験所近くのアイカップ岬付近の磯の動物について、現在と約50年前とを比較してみますと、昔は普通にいたものが現在ではほとんど見かけなくなったというものがいくつもあります。この原因はいろいろあると考えられますが、今までほとんど自然のまゝだった所にだんだんと人（研究者も含めて）が入りこんできたことがその一因となっていることは疑いのないことと思われます。豊富な、そしてこの沿岸特有の海の生きものをいつまでも守って行きたいものです。

アカボヤとエラコの棲管

ヒバマタとエゾイシゲ

霧多布湿原・夏

霧多布湿原の魅力

伊東　俊和

タンチョウをはじめたくさんの野鳥が生息…ラムサール条約に指定された貴重な自然……

〝霧多布湿原の魅力を伝えたい〟と考えているところへ仲間が来た。だけど、どうやって伝えるか難しいねと、助けを求めると、「霧多布湿原の魅力を伝えるなんて簡単だよ」と言って、いつものように話し出した。

「〝いい女性(ひと)〟っていうのがいるでしょ、どういうのかっていうことは、一口ではいえないけれども、みんな自分なりの、一番いいというやつを、それぞれに持っていて、何かの折りにつけ「いいやつだなあ」なんてことをつぶやいたりしているけれども、理屈じゃない。

そういう「いいところだなぁー」というのが、この霧多布の湿原なんですよ。

おまけに、そんな〝いい女性って〟いうのは、それこそ手に入れるなんていうのは夢のまた夢、せいぜい遠くから眺めるだけが関の山といったところだけれど、この霧多布湿原はそうじゃない、すぐそばで見れる。おまけに少しぐらいなら触ったってだいじょうぶだし、その気があれば頬ずりだってゆるされる、これがいいんですよ……。」

と、わけのわからないことを言いだした。

まあ霧多布湿原というのは、そういう夢の魅力があふれているところです。

花の湿原

霧多布湿原には、確かにここに来る人みんなに「いいところだなぁー」と、つい言わせてしまうなにかがあります。

湿原というのは、海でもないし、陸でもない、なんと表現しても言葉足らずで、ずばりこれだと言えないものがありますが、そんな捕らえどころのないところが、不思議な魅力となって、私たちを引き付けているのかもしれません。

霧多布の魅力は、「自然と人とそして食べ物」だと、東京から幾度となく訪れている旅人が言っていました。

霧多布湿原は3100ヘクタールほどの広さで、これは道内3番目に大きなものです。

しかし「花畑」ということになれば、どこにも負けないと、地元の人は胸を張ります。

まさに原生花園というのはこういうところを指すのだと自慢します。

霧多布が「花の湿原」といわれるのも、その美しさをたたえたものなのかもしれません。

カンゾウ一色

漁師さん

タコ

味

またここは、漁業と酪農の町です。自然に向かって働く人々の知恵や姿に、人の生きるたくましさを感じさせられます。

都会の中でいつのまにか失ってきた大切な何かを、教えてくれるかもしれません。

そして「味」もまた霧多布のもつ大きな魅力のひとつです。

でもこれは、ほとんどの旅行者は気が付かず通り過ぎてしまいます。ちょっと地元の人と話をすれば、今まで知らなかった「旬の味」に巡り会えるはずです。

エゾエンゴサク

キバナノアマナ

キタコブシ

ネジバナ

春

雪の少ない霧多布は、凍りついた土が、表面から少しずつ柔らかさをとりもどすのも4月に入ってからです。

そんな頃、湿原周辺の日当たりのよい林の中にいち早く顔を出す、スプリングエフェメラルを見つけます。

この地方の桜の花見は、エゾヤマザクラが見ごろを迎える5月の末になってからです。

そこで、それまで待てない花見の輩にとって、コブシの咲く5月始めが花見のかわきりとなります。

道外各地から花見の便りが届くころ、湿原の山際、青い空を向こうに、シラカバが見え隠れし、まだ若葉も浅い木立の中で、ひと際目立つ白い清楚なコブシの花は、まさに北国の春そのものの風情です。

6月末になると、湿原全体がワタスゲに覆われます。夕暮れになると、その白い穂が、沈む陽をうけて銀色に輝きます。

「これがあるから霧多布に来てしまう」と旅行者が口にします。想的な湿原です。

夏

一面のワタスゲの所どころに、点のように黄色の花が目立ち始めると、やっと夏の到来です。　7月に入り、暖かさがすこしずつ増すに従い、エゾカンゾウの花がワタスゲに変わって、湿原を黄色く彩ります。

これから9月にかけては、もっともたくさんの旅行者が訪れる花の季節です。

クロユリ・コケモモ・ハクサンチドリ・ヒオウギアヤメ・ネジバナと百数十の花が湿原やその周辺を舞台に次から次へ咲きだし、これが「原生花園だよ」と語りかけます。

手の届く処で展開する花のファンタジーに、「人の住むすぐそばに、なんでこんな花畑が見られるの、何でこんな海のすぐそばで高山植物が見られるの」と来る人を驚かせます。

地元の人に尋ねれば「あたりまえだべ、昔からだ」とかたづけられる。こうした身近な処に、こうした美しいものが残されている。それが〝あたりまえだ〟というところが、霧多布の魅力の大きさです。

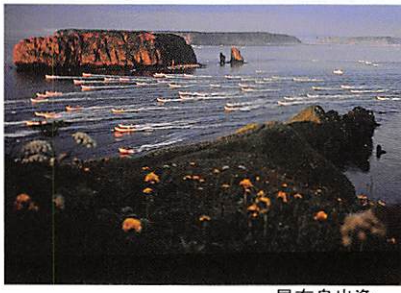
夏はこの町が一番活気に溢れる時です。

この町は漁業と酪農が主体の町で、中でも昆布漁は国内一番の生産量を上げています。ちょっと早起きをすれば、昆布漁の船が一斉に漁場をめざして走る勇ましい情景を見ることができます。また取ってきた昆布は、家族総出で干場に並べます。声をかければ手伝わせてもらえるかもしれません。

霧多布湿原はこの浜中町沿岸の漁業の生産

ワタスゲ

ツルコケモモ


昆布舟出漁

昆布干し

タンチョウ親子

エゾリス

横断タンチョウ

エゾシカ

に、重要なかかわりをもっていると言われています。

霧多布湿原は、1993年ラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）の登録地として指定されました。

国際条約でも、この霧多布湿原の価値が認められ、改めて保全の重要性が提唱されたわけですが、この湿原は、花ばかりでなく、天然記念物のタンチョウをはじめとする、たくさんの水鳥や草原の鳥、また周辺に見られる動物たちによって、その魅力が一層引き立てられています。

しかも、こういった生き物たちが道路沿いから、すぐ見られるといった贅沢さをもっています。また、その反面気をつけていないと、動物たちと衝突事故なんてことも、よく起こるので要注意です。

1993年５月に、霧多布湿原を見下ろす高台の一角に「霧多布湿原センター」がオープンし、霧多布の自然や、滞在情報などを提供しています。

また、霧多布湿原の眺望が楽しめるようになっている展望ホールがあり、多くの旅行者が、「こうしていると、日々の忙しさを忘れてしまいますね」と、ゆっくりとくつろぎのひとときを過ごしていきます。

館内にはシマフクロウ、オオワシといった大型の鳥をはじめとするカービングの他、この町や自然についての情報が、ゲームのスタイルで展示され、ロビーコンサートも行われるなど楽しさが演出されています。

秋の湿原

秋

秋の主役は夕焼けかもしれません、都会では見たこともない夕空の芸術を、鮮やかな色彩で見せてくれます。映画などで、黄金色に染まった草原が映しだされますが、霧多布湿原の秋はまさにその世界です。

夕日が作りだす不思議な美しさ、その時間とともに変わる色彩の魅力を楽しめるのがこの季節です。

冬

この時期、なんといっても楽しいのは、全てが凍ることです。池や沼はもちろん、海まで凍ります。もちろん湿原も凍ります。川も凍ります。

そこで普段歩いて行けない所にも、みんな行けるようになります。

スキーをはいて、湿原を横断します。

氷に穴を空け、釣りもできます。

静けさだけの世界に、キツネやシカの足跡が自然の物語を描いています。

「冬こそ湿原」という楽しみを見つけると、霧多布の魅力が倍になります。

スキーをはいて湿原の真ん中に行きます。そこに立つと、まさに地球に立っているという感じです。いつもの仲間がまた口をはさむ。

歩くスキー

「湿原の魅力って、たくさんありますよね、でも、それをどううまく見つけるか、それを楽しむことができるか、それは〝やさしさ〟ですよ。優しくないと自然だって遊んでくれないんです。

〝女性を大切にするように、自然に優しく〟それが鍵です。でないと大けがをします。」

どうも彼の頭の中では、湿原と女性が同じところにいるらしい。

厚岸の自然と人間の歴史に学ぶ

俵　浩三

アッケシの地名はアイヌ語で「アッ・ケ・ウシ・イ（オヒョウニレの皮をいつも剥ぐところ）」からでたとされています。オヒョウニレの皮からは、いうまでもなく繊維をとり樹皮衣（アトゥシ）がつくられました。皮を剥がれた木は枯れてしまうのではないと心配ですが、アイヌの人々は、けっして木が枯れないように皮の一部だけを剥ぎ、しかもその前に、木から皮をいただくお願いと感謝のお祈りをしたそうです。

昨年（1993）、釧路でラムサール会議（国際的に湿地を守る条約の加盟国会議）が行われましたが、そのキーワードとなったのは自然資源の「賢明な利用」（ワイズユース）でした。これは資源を枯渇させず、環境を痛めず、永続的に自然と人間が共存していこうという考え方ですが、アイヌの人々は昔から「賢明な利用」を実践していたのです。釧路での会議を機会に、「霧多布湿原」「厚岸湖・別寒辺牛湿原」もラムサール条約の登録湿地になりました。

ところでアッケシの語源には、「アッケシ・イ（カキのいるところ）」という説もあります。厚岸湖にはたくさんのカキが自然産卵し、昔からアイヌの主要な食料とされていました。しかし明治以降

エンコウソウ

フデリンドウ

は日本人が産業としてカキを大量に採取したため、たちまち資源が枯渇してしまいました。しかも厚岸湖に流れ込む河川の上流地域での森林が伐採や山火事で失われたため、一時に湖水へ流れ込む水量が増大して水温が低下し、カキの自然産卵ができなくなってしまったのです。これは「賢明な利用」に逆行した苦い歴史です。現在では、その反省から、環境を大切にするカキの養殖産業が復活しつつあります。

また「日鑑記」など多くの文化財で知られる国泰寺の境内には、色古丹松（グイマツ）や老桜樹など、歴史的風土を実感させる静かな環境が保全されており、ここでも自然と人間の交流の一端をかいま見ることができます。

厚岸道立自然公園には、自然と人間のかかわりの過去、現在、未来について、いろいろと考える素材がそろっています。皆様も「賢明な利用」について考えてみてください。

この本を作るにあたって、北海道および㈶前田一歩財団ならびに全国労働者共済生活協同組合連合会からは財政補助をいただき、また執筆者はじめ、多くの方々のご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

ヒメイチゲと
ユキワリコザクラ

北海道自然保護協会

頒 価 700円